

失語症患者のコミュニケーション

- C. Goodwinの論文をもとに -

寺尾香名子

0. はじめに

エスノメソドロジーは、どのように障害者研究を扱っているかに注目した。今回は失語症患者の研究を行っている、Charles Goodwinの論文「Co-Constructing Meaning in Conversations With an Aphasic Man」(失語症患者との会話における意味の共同組立)をもとに、失語症患者が限られた語彙を用いて、他の参与者とどのように相互行為を成し遂げていくか、コミュニケーションしていくのかを見ていく。彼はビデオ撮影から得られたデータをもとに、ビデオ分析を行っている。

1. 要約⁽¹⁾

①この論文で何を研究しようとしているか。ある男が人生の残りにおいて、三つの単語しかしゃべることのできない立場になったことを想定してみる。彼はどの単語を選んだか。その選択は言葉についてわたしたちに、何を教えてくれるだろうか。それらの制約の中で年々、生活の形式として、言語ゲームを遂行することから分かってくることは何であろうか。

②ロブ⁽²⁾は脳卒中で左脳を損傷し、右半身が麻痺した状態になってしまい、重い失語症⁽³⁾になった。そのため意味を持った言葉をしゃべるといふ能力はほとんどなくなってしまった。しかし、彼に対して他の人がしゃべっていることは理解可能であるし、〔他の人にとっては〕無意味な音節を使用して意味のあるイントネーションを作り出した。ロブの家族は彼をリハビリテーションに行かせたので、歩くことを覚え、三つの単語を覚えた。それは、YESとNOとAND⁽⁴⁾である。この三つの単語は、家族内で意味や理解が達成される相互行為での連接(シーケンス)にとって中心となるものである。イエスとノーが、幅広い行為や意味の枠組みを取り囲んでいる。

③なぜ、これら三つの単語を選んだのか。三つの単語は、ほかの人との話を結びつける役割がある。イエスやノーは、隣接対の第二対成分の原形で誰かが質問したことに対する返答を構築している。アンドは話の単位をつなぐ。彼の話は独立した存在として孤立するのではなくて、ほどけることのない繋がれた他人との話の中に位置している。このシステムが非常に希薄なものであるにもかかわらず

ず、複雑な言語ゲームに従事することと、種々の行為をしながら幅広く異なったことを言う可能性を高める。話し手は複雑な言語ゲームに従事している。この論文では、〔言語ゲームでの〕共同組立が参与者によってどのように成し遂げられるかを示している。失語症の患者が、相互行為をどのように組織していくかを示すために、会話分析という方法を用いて今現れつつある研究の本体に貢献している。

ACTIVITIES AS INTERPRETIVE FRAMEWORKS (解釈的な枠組みとしての諸活動)

〈断片1〉⁽⁵⁾ [ナースはロボの足の上で、ソックスをひっぱりあげている。彼女はソックスの上の部分を持ち上げるために手をそこへ動かしたところ]

- 1 ロブ: にゆむ にゆむ [ソックスの方を指さす]
- 2 (1. 3) [看護婦がロボの方を見て、それからソックスに戻る]
- 3 ナース: もっと上げるの?
- 4 ロブ: はい (Yes)
- 5 (1. 8) [看護婦がソックスの下の方を引っ張り上げる]
- 6 ロブ: は:い (Ye:s)

① 〈断片1〉は相互組立の単純な例である。ロボの世話は妻がしていたのだが、病気になったので、ナースにロボの世話をしてもらうことになった。ナースがソックスの上の部分を整えるために動いた時に、1でロボは何かを言い、ソックスを指さした。ロボが彼女へ注意を向けていることについての推測を、3で彼女は述べる。この推測は第一対成分として述べられている。3はロボがナースの提案を受諾したか拒否したかの選択肢の溝を作り、彼が言おうとしていることを協力的に探し求める接続(シークエンス)の構築を助けている。彼のイエスはそれ自体では完全な文/行為として孤立しておらず、対話者との事前の作業を通して、作り上げている状況の中で適切な意味を成し遂げている。

② ここでいくつかの特徴が挙げられる。第一にロボは主語・述語の入った文章はしゃべれないが、相互行為における語りの実際的な組織を認識したり、組織に参加したりすることができる。例えば、返答が適切な場所で正確に作り出されている。

③ 第二の特徴 彼の対話者の行為が特別な形を作っている。例えば、彼が言っていることについての推測をすることである。ここでは直接的に関与している狭い限られた範囲での行動で、彼が彼女に対して直ちに言ったことを理解しようとする。相互に認識された行動により、彼が言いたいと思っていることを対話者が理解できる本質は、ロボとその協力者がある意味を成し遂げる推論や行動の中心過程のなかにある。しかし、彼が新しい話題について話したいと思うとき、対話

者に対してそれを分からせることができるのかが難しい問題で、彼はそのことに直面している。

④ 3, 4のような隣接対がここでも見られるということは、私たちの日常生活と同様に、言語の組立の展開を通して、ごくありふれた相互行為を協同的に作り上げていることがわかる。

SEARCH SEQUENCES (探求の接続)

①ロブの言おうとしていることを協力的に促す接続は、語りにおける相互行為の組織に与えられている基本的な構造を使って作られている。ロブとその家族によって使われている接続の特性は、特別な言語ゲーム、特有の仕方での相互行為を構成している。次に挙げる〈断片2〉は接続がどのように広がっているかを示すものである。このやりとりが始まる時点でナースはロブに何が欲しいのかを冷蔵庫のところで尋ねている。

<断片2>

- 3 1 ナース：イングリッシュマフィン？
3 2 (3. 4)
3 3 ロブ：はい (Ye:s)
3 4 (0. 4)
3 5 ナース：そ／／して その上に何を塗る [質問]
3 6 ワイフ：／／それだけ
3 7 (0. 8)
3 8 ナース：ゼリー？ [第一の可能性]
3 9 (1. 0)
4 0 ロブ：いいえ：(No:) [第一の可能性拒否]
4 1 (0. 8)
4 2 ワイフ：バター／／ー？ [妻参与]
4 3 ナース：／／バター？ [第二の可能性の提示]
4 4 (0. 8)
4 5 ロブ：はい (Yes) [受諾、探求の終了]
4 6 (0. 6)
4 7 ナース：わかった

②ロブが対話者の推測を受け入れるとき、接続の拡大が終了する。イングリッシュマフィンの上に塗るものを尋ねた後で(3.5)、ナースは第一の可能性を提示する(3.8)。ロブが第一の可能性を拒否した後で(4.0)、ナースは第二の可能性を持ち出し(4.3)、それがロブに受け入れられたので探求の接続は終了した。

イエスとノーは非常に異なった種類の出来事を形成する。「イエス」は推測していた接続からの出口を与えるのに対し、「ノー」は新たな推測を導く。〈断片2〉は唯一小さな広がり、多くの場合は接続が広がりすぎて、長引くことが多い。

③接続の組織に関係する多くの現象が、〈断片2〉に見ることができる。第一に多くの落ち着きどころのない交渉と違って、「20の質問」というテレビ番組のように、ロブ〔答える側〕だけが正しい答えを知っていて、対話者の発話〔質問する側〕が正解か間違いかを言う権利があると見てとれる。第二にこの結果、強い分業がある。彼が言おうとしたことについての提案を彼が受け入れたり、拒否したりする一方で対話者は適切な推測を与えている。第三に新しい推測を系統立てて述べているので、ロブの対話者は体系的な作業に従事している。例えば同じカテゴリの中で代わりとなるものを探すこと。しかしこの論文の後半に見られることだが、対話者が作り出した推測は、間違ったカテゴリー体系を選んでいる可能性が高いこともある。第四にロブは最もしゃべらない当事者だが、活動の組織は彼を中心に、焦点の参与者としての位置づけにある。

RESISTING INTERPRETIVE FRAMEWORKS(解釈的な枠組みに対する抵抗)

①協力的に達成される過程が複雑であることは、〈断片2〉の前に起こった話にあらわれている。次の断片は朝食に何が欲しいか尋ねられているところである。

〈断片3〉

- 1 ナース：トーストどう？
- 2 (0.6)
- 3 ロブ：はい：， = (Yes:，
- 4 =う、いいえ：， uh no:)
- 5 (0.7)
- 6 ロブ： // ()
- 7 ナース： //チーズ？
- 8 (0.2)
- 9 ロブ：いいえ、いいえ (No no.)
- 10 (1.2)
- 11 ナース：バター？
- 12 (0.3)
- 13 ロブ： いいえ (No)
- 14 (2.4)
- 15 ナース： //うーん：
- 16 ロブ： //いいえ：， (No:，)
- 17 (1.2)

- 18 ワイフ：ゼリー？
 19 (1. 0)
 20 ロブ：いいえ (No-)
 21 (0. 9)
 22 ナース：//ええっと
 23 ワイフ：//イングリッシュマフィン？
 24 (0. 3)
 25 ロブ：はい (Yes.)
 26 (0. 3)
 27 ワイフ：あなたはイングリッシュマフィンが食べたいのね。
 28 (0. 4)
 29 ロブ：はい (Ye:s.)
 30 (0. 9)
 31 ナース：イングリッシュマフィン？
 32 (3. 4)
 33 ロブ：は：い (Ye:s.)
 34 (0. 4)
 35 ナース：そ//して その上に何をのっけましょうか。
 36 ワイフ： //それだけ
 37 (0. 8)
 38 ナース：ゼリー？
 39 (1. 0)
 40 ロブ：いいえ： (No:)
 41 (0. 8)
 42 ワイフ：バタ//ー？
 43 ナース： //バター？
 44 (0. 3)
 45 ロブ：はい (Yes.)
 46 (0. 6)
 47 ナース：わかった

彼はその場に適した状況において、自分の能力の範囲内で微妙に異なる行為を展開している。これを研究するには、次のことを吟味する必要がある。行動を表明することの詳細さと、ロブがイントネーションや体の振る舞いを通して参与を変えていくことを明らかにしていくことである。

②〈断片3〉の接続における構成の問題は、参加者にとって特別な問題を提起する。ロブは朝食に食べたいものを尋ねられており、それが〈断片3〉の23か

ら29において、イングリッシュマフィンが食べたいことが成し遂げられた。これに照らして問題は、彼がトーストが食べたいか否かに関する、1でのナースの質問に対する答えの構築のなかに提起されている。イエスとノーは二者択一の選択を形づくるが、実際問題として提案は明らかな間違いでもないし、正確に探されているものでもない。「ほぼ正しい」、「ほぼ当を得た」〔に相当する〕。ロブが明らかに「ノー」と言わなかったために、対話者たちがトーストに代わるものとしてイングリッシュマフィンをなめらかに導き出すことはできなかった。

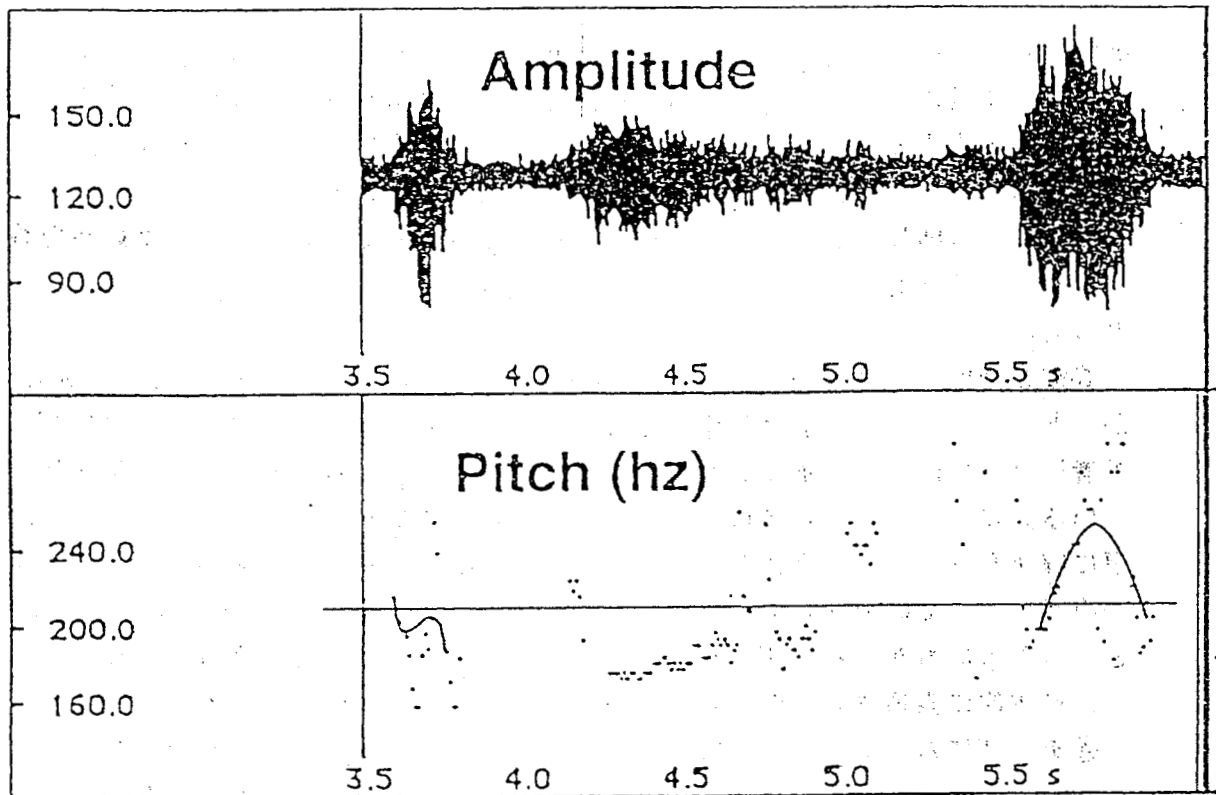
Yes as a Textured, Nonbinary Answer(おりなされ、二者択一的なイエス)

①ロブの語彙は限られているが、イントネーションや音のばしと言う詳細な方法や体の振る舞いを通して、自分のいっていることに対し、明らかに自分の姿勢を持っている。例としてトーストについての質問の後、イエスという返答を行っているが(〈断片3〉の3)、語尾があがっている。この形はしばしば後に〔接続が〕続くことを促す。イエスとノーは、異なった種類の連鎖的なものとして機能しており、イエスは探求を終える、ノーは探求が続く。ここで話し手はイエスと言っているが、イントネーションを用いて探求の継続を表示している。朝食は欲しいと断言しているかもしれないが、対話者は推測し続け、探求しているものを明らかにするという、意味論上のリソースと連鎖的リソースを彼は併用している。

②〈断片3〉の3のイエスと29、33のイエスは対照的だ。29、33のイエスは探求がやっと終わった、自分の欲しいものがわかってもらえた結びのイエス。最後の音を下げるという基本型のイントネーションで最終的な完了をあらわす。

③ロブはイエスという原型としては、同じ言葉を使用するが、話す話し方における異なりを利用して、探求を続けることと止めること、将来の行為を別様な軌道に乗せるという连接的に異なったものを生み出すことができる。さらに〈断片3〉の19で視線をそらし、「イングリッシュマフィン」と聞こえた際に妻のほうを一心に見て、期待の表情を示した。体の振る舞いと話を組織するやり方でロブは、次の順番への修復反応の組み合わせとして、ここでの「イエス」を形成している。

④このことはピッチトラック⁽⁶⁾〔図1〕から見てもわかる。二つのイエスは、ピッチの形、声の高さ、継続時間、振幅が異なっている。〈断片3〉の29の声は始めから強く、声も大きく、単語をしゃべる時間も長い。しかしこの二つのイエスは互いに関係があり、参加者が探求していたものが見つけたことを25での「イエス」に表しているので、29のイエスが感謝の意を表示していると思われる。



English muffin? Yes. Do you want Yes.
 Line 25 an English Muffin? Line 29

FIGURE 1 Pitch track.

図1ピッチトラック [C.Goodwin,1995:245]「FIGURE1 Pitch track」より

Framing Opposition :Taxonomic Organization as Resource and Constraint
 (抵抗の枠組み：リソースと制約としての分類の組織)

①〈断片3〉における7, 11, 18 [「チーズ?」「バター?」「ゼリー?」]の選択は、トーストに代わるものではなく、トースト、イングリッシュマフィン、ロールパン、パンを含む種類の数を広げうる。〔コンディメンツとパン〕二つの種類は、性質は異なるが、ある種食べ物としての統合した構成要素として、互いに補足的な関係として成り立っている。ロブがパンに何を塗るかに付いての選択の接続に参加しているとすると、トーストという選択肢を捨てただけでなく、トーストが選ばれることを前提にしていたように思われる。ここでの〔コンディメンツについての〕選択をすることで、本来の答えであるマフィンがだんだん遠ざかっている。トーストに代わるものとしてパンというレベルでの選択肢にまで戻るには、今追っている行為の連鎖に反対する問題に彼は直面している。ノーは、反対を表明するための言葉として使われる。しかしながらここで彼の共同者によって作られる特別な接続の状況、つまりノーという言葉は、後の選択から考えて特

別な代わりを拒否しているように聞こえるだろう。ロブがイングリッシュマフィンを手に入れるために、接続を広げる代わりに接続を終える〔ための〕「ノー」を表示する問題に直面している。どのようになされているかを探るために、ここで起こっているノーの場所を詳細に見ていく必要がある。

②ロブは〈断片3〉のトーストについての質問に対して「イエス」といった後に、4で「uh no」といった後すぐに、手を顔のあたりまで持ってきて左右に手を振った。

③彼の身振りは、「トーストのようなもの〔イングリッシュマフィン〕は欲しいが、トーストではない」と注釈できる答えを作りだそうとしており、〔これは〕分析者にとっては議論することが簡単になった。しかし、ロブとともに生活を送っている人にとっては、たまに起こることの一つにすぎない。そのため解釈上の問題に解決を与えるというよりも、そのような身振り手振りが何を示しているのかが当事者にとっては分からないので、彼らを困らせる。〈断片3〉の3で「イエス」といったのにもかかわらず、ロブが欲しかったものはまだ確定されていないことを、具体的に表現された合成物の行為として身振りは貢献している。

④チーズに対するロブの返答〔〈断片3〉の9〕は、単なるノーではなく、「No no」であった。これを分析するには、データ収集をしなくてはならないが、直観的に「No no」と繰り返すことは、ある活動に対して反対したり、人がしていることに異議を唱える時にしばしば使われるように思われる。提案に対する返答を行うように、さらなる活動の発展のなかで交互に参加することを成り立たせるだろう。これはおそらくあたっているだろうし、ロブが試みようとしている。けれども彼が話をしている人物（その人は同時の相互行為という制約にもかかわらず、次に何かを言おうとしているかを見つけだす仕事に直面している）が代わりになるコンディメンツを探し続けている事実により、過程の細かい箇所において明らかに例証されている。

⑤「ノーノー」の後に続く沈黙において、〔ナースに頼ることをやめ〕ロブは自分で単独の探求に従事するために、ナースからの注視をぞらした。

⑥彼の注視は対話者から次の話を聞く用意ができていることを示しているが、〔それを止めたので〕自分を聞き手としてもはや位置づけてはいない。彼は一時的に見上げてナースが「バター」と尋ねた後、特に強調してまた「ノー」と言った。（断片3）の45では彼がイングリッシュマフィンで選んだコンディメンツはバターであったことと対比してみると、〈断片3〉の13の「ノー」はバターの代わりになるものが欲しいという拒否というよりも、活動自体〔バターかどうかについて聞くよりも、その以前の問題について尋ねて欲しい〕反対を示している。

⑦〈断片3〉の16において、ロブはその中で提示されている選択よりも、とても鮮明なやり方で接続それ自体を反対していると表示することができる。ナースが次の選択肢をいう前にロブは「ノー」と言っている。ナースが言おうとした

こと—コンディメンツの接続自体—にはっきりとした反対を示すために彼は利用できる一つの適切な言葉を利用した。

⑧〈断片3〉の20において〔ロブはノーと言っているが〕、彼は過程から失意の離脱を表示するために、声で感情を表に出すことと、体の振る舞いの両方を使用する。ロブが単独の探求に従事するために対話者から注視をそらしているのが、9の後の10の沈黙の箇所で行われていた。彼はナースが聞き手であるという期待をもって振る舞ってはいないが、明らかに探求に従事することで、彼は過程のなかに自分を含んでいることを例証するものである。一方で、体は彼の協力者の方を向いたままで、頭を下げた。〈断片3〉の20において妻の「ゼリー？」に対する反応は、ロブは妻の方を一心に注視し、妻やナースが立っていない方向へ視線を移動しながらやわらかい口調で、短く「ノー」と答えている。これは直面している編成の外部を相互の体の位置で構成している〔と考えられる〕。彼はこのように顔の表情で身振りですして体で、鮮明に〔この接続が〕不本意であることを表示している。

⑨彼の共同の参加者が、この時点まで追跡していた一連の行為を異議申し立てや深刻な問題の発見とみなす、例証が次に彼らが行うことにより分かっている。ナースは接続中—カ所に立っているが、彼が欲しいものを見つけようと異なったやり方を試みるために冷蔵庫の方へ向かって歩き始めている。と同時にコンディメンツの連鎖から脱する、つまり妻はカテゴリーの種類を変えて、ロブにイングリッシュマフィンが欲しいかどうかを尋ねた。

⑩分類の組織や他のカテゴリー体系は認知人類学の分野で主要な研究となっている。ソシユールの概念であるランゲをモデルとして使うことは、実際的な行為過程の位置を決めた。そのような分析の根本的な所産は、抽象的で時代を超越した体系であり、根元的な他と区別を示す特徴や文を生成するルールや分類体系的な樹形図という言葉で描写されている。このデータは私たちに次のことを与えてくれる。その時々に応じて表明する形や、実践の立場にある形としての分類の組織を探ること、また適切に位置している分類が共同的に構成され偶然性のある達成として現れていることなどである。ロブがイングリッシュマフィンを欲しいという事実は、こじつけられ、論議された分類上の空間を通じ協力的な歩みをもって決着をつけた。

CONCLUSION(結びに)

①ロブの話を作るという能力がかなり制限されているために、これらのデータにおいて意味の生成というものが、協力的に共同組立の過程として見て取れる方法を例証した。接続の種類は、全く文字通りの生活の形式であるものを生じさせる理解を成し遂げるために家族内で展開された。その体系〔接続の体系〕は、様々な種類の参加者が、様々な種類の認知的連鎖作業を行うという明らかな分業を

含んでいる。体系は行為や理解を組織するだけではなく、結局謎は解明されるのだが、異なった種類の範囲で困ったことも起こる。その上ロブの言語面での不利な立場は、相互行為における語りの実際的な組織を認識したり、活発に参加したりする能力上の制限を伴ってはいない。自分の意志を通じさせるために彼は〔対話者に〕頼り、さらに彼が埋め込まれている語りとしての連鎖組織を助けてもいる。語りにおける連鎖的な場に参加することや、体の部分で可能な限り表現することで、彼はその場その場の局域的な組織の偶然性を詳しいところまで見事に適合させ、幅広い微妙な行為を作り上げることができる。

②〔彼にとっては〕ライフサイクルの終わりに反対のことが起こってしまったが、連鎖の構造はOchsやSchieffelinやPlattにより描写されているものと著しく似ている。特にPlattの研究においては、限られた言葉のリソースしか持たない子供が、言おうとする試みを幼児や世話人と同僚たちが協力的に確立していく様子が描かれている。重大なことに両方の設定においての主張は、孤立した話し手のそれだけで完備した文章を符号化したのではなく、異なる参加者の発話に及ぶ分類された構造を通して構成されていることである。

③この過程の中心は、会話分析者が連鎖組織として研究することから与えられた状況や意味を構築する可能性のことである。それはロブのような行為者が、限られた語義に関するリソースで幅広い多種多様な行為を可能にした新生の連鎖組織を引き合いに出して、変化するレリバンスの本質によって精密に与えられた順応性のある可能性である。さらにロブの語彙である三つの単語 - yes、no、and - は単に頻度の高い単語としてだけでなく、連鎖行為のなかで彼の話と他の人の話を結ぶために存在しているように思われる。この特定の語彙の使用で、彼は対話者によって与えられた適切な言葉の組立を寄生的に構築することができる。

④目下の活動で彼の認識できる参加を通して、ロブは自分の意志を通じさせ、意味を持った行為者として自分自身を構成している。彼が何かを言う方法（イントネーション）や彼の身体がどのように組織されているか（身振り、体の向き、顔の表情）の両方の変化を通して、彼は他人がしていることに返答することができるだけでなく、起こっているほうへ姿勢を向けて、そして彼が追跡したい方向へ相互行為をもっていくこともできる。相互行為における参加の分析として一つのアプローチは、異なった種類の参加者（例えば話し手、聞き手、ふと聞いている人、話を向けている対象など）にとってカテゴリーとしての生成と組織に焦点が絞られる。表明したなかでの参加の表示変化や特定の活動における偶然の流れは、行為者に理解と出来事での位置、そして過程でのさらなる軌道づくりを示していると思われる。語りの状態における組織に関係している様々な種類の本質に、抽象的なカテゴリーセットとして構成されていることよりもむしろ、参加はちょうど今起こっている活動の特性に入り組んだ注意を必要としている行

為の形であり、それは時々に応じて表明される。そのようなパースペクティブから見ると、参与は協力的に意味を構成する中心にある。適切な出来事が時間を通して表明するとき、それは分類された多数の行為という枠組みのなかで理解が組織され、喚起される方法の一つである。参与の社会的認識に基づいた構成要素は、時々に応じて表明される共同組立の過程においてほどけることなく絡み合っている。

⑤共同組立の過程は、他の人がロブを有能な共同参与者として扱う必要があることをここで研究した。これは脳に障害を受けた人の手当たり次第の動きというよりもむしろ、彼の話や身振りはひとつひとつに意味のある、何かを言おうとする努力として取り扱うことである。ロブが何かを言おうとしているだけでなく、彼の対話者が彼に言っていることを彼が評価できることを前提として推測を続けている。彼は自分だけでしゃべる能力は持っていないが、複雑に話された言語を理解できる人として扱われている。これら仮定の正しさは、彼の継続相、すなわち他人との相互行為連鎖のなかで、正確な箇所まで参与して行くことで例証されている。さらに、アメリカ社会のなかで他人はロブのような大人を、能力があり、責任を果たしうる行為者とみなすことを拒否できるし、している。脳卒中を起こした後、医者集団は彼の尿道にカテーテルを差し込んだ。医者がこの作業をしていた時、彼は指を指し続け、口頭で不服であるようなことを言い続けた。行われている手続きのなかで彼を共同の参与者として認めるよりもむしろ、彼が作り出す身振りや音を医者たちは脳を損傷して、まさに苦しんでいる男のわめきとみなして彼の行動を分かっていた。三日後、医者はカテーテルが間違ったところに差し込まれていたことを見つけた。そのためロブはずっと痛みを訴えていたのである。

⑥1982年にHollandは次のように書いている。「未発表の観察研究ではあるが、失語症患者の自然なコミュニケーションは今のところ利用できる。」その時より「毎日の状況で失語症患者が使う言葉上の管理計画に重点を置く必要」という注意に目が向けられた。その上全体的な概念としての「状況」が組織の実践である適切な方向として分解されるにちがいないことが認識された。Foldi、Cicone、そしてGordnerによれば「コミュニケーションを助ける『状況』とすることをさらにする必要がある」と述べている。「しかし、状況という概念が重大な意味を与えてくれることができると、その様々な構成要素や感情などを表示するものを実地に試みることによるのが、唯一である。例えば、話すという行為の実際的な構造で使うイントネーションや身振りのような変化する道具、予想、順番取得、物語における情報の冗長性など。」この論文は分析の一つの鍵となる、状況の構成要素、連鎖組織、ひどい失語症の人が意味を持った会話を他人とすることが可能なことを詳細な分析で提供している。

⑦この論文はロブの能力と彼の周りにいる人が、単に要求された連鎖において

理解を成し遂げる姿に焦点を当ててきた。しかしながら彼が複雑な物語に従事できるのも、彼の妻が彼と一緒に共有した出来事を覚えているからである。だから、彼は彼女の言っていることに対して、イントネーションや限られた語彙をもとにコメントすることができる。彼が自分の言っていることを分からせようとして使用する実際的な言語能力の広くて重要な幅に注意を引くことは、彼が誰かと会話することのできる完全なコミュニケーション能力を持っていると提案することに全く意味はない。もし彼が「イングリッシュマフィン」と簡単に言ってしまうと、ここで吟味されていた作業すべてが不必要になるだろう。しかしながら、ここで示されている出来事は、言葉を作り出すという能力に基づく、伝統的な能力評価に異議を唱えるものである。ロブが病院にいたとき、医者はどうな治療も単なるぼろ隠しで、時間の無駄となり、根元的な脳の損傷は治療されることがないと述べた。真実から全くかけ離れているとは言えないが、そのような問題観点に基づいた医療的な助言はロブやその家族のような患者に回復できない損傷を負わせることになるだろう。しかしながら、生活の形式として、他人と協力した世界に存在しており、行為をする方法は、その適切な位置が内発的で分類された多数側の体系にある。

2. 考察

この論文の著者であるC. Goodwinは、現在サウスカロライナ大学の人類学の教授であり、人間の身体的・言語的相互行為の研究者として有名なエスノメソドロジストの一人である。人間の言語行動は、話し手と聞き手の相互行為によって生み出されることを研究で示している。相互行為において、聞き手であるためにあるいは聞き手であると言うこと（聞き手性）を表示するために、身体的行動、中でも視線が重要な役割を果たしていることを明らかにした。また、飛行場のオペレーションルームでの人間の協同作業の共同研究や、科学調査船における科学者や乗組員たちの共同作業の研究を通して、テクノロジーを用いた人間の協同行動の研究者としても有名である。この研究のために、C. Goodwinは科学調査船に実際に乗り込んで、相互行為をビデオ分析している。そこでは認知や会話の連鎖が特定空間におけるさまざまな道具と身体の配置に関連した形で組織されていることを明らかにしようとした。

イエスとノーは後に続く接続に大きな影響を及ぼす。ロブが対話者の提案にイエスと答えるならば、探求は終了するのだが、ロブがノーと答えてしまえば探求は続き、対話者は可能性のありそうな提案を次に行う。

<断片1>⁽⁷⁾における3のナースの発話と4のロブの発話が、「提案—受諾」の隣接対となっていることは明らかである。さらに5、6を見ると5でナースがソックスを引っ張り上げ、それに対し6でロブが「イエ：ス」と言っている。これも「提案—受諾」の隣接対と見ることができ、「今日暑いな」の発話に対して、

他の人がクーラーのスイッチを入れる行為と同じ意味をあらわす。つまり、前の発話者に提案されたことを、自分に向けられたものだと理解し、応答者がある行為で受け入れを表示することである。この場面においては、ナースがソックスを上げるという提案にロブが受諾の発話をしており、前の例とは発話と行為の順番が逆であるが、ロブとナースの間にも相互行為がなされていると言えよう。

<断片3>⁽⁸⁾は、ナースがロブに朝食についての質問をしたところ、彼は朝食は食べたいのだが、トーストではないものを欲しいと発言した。ナースはロブはトーストが食べたいのだと思い、コンディメンツ（パンに何を塗るか）の提案をした。彼は彼女の問いかけにノーと答え拒否する。この拒否は連接自体を拒否するものであったので、彼は手を左右に振ったり、ナースから視線を外すことをしている。そこでナースは、質問ではない方法を使って、ロブの願望を知ろうと思い、冷蔵庫の中身をみせようと歩き始め、妻はカテゴリーの種類を変えて、「パン」の種類の中から「イングリシユマフィン」という提案をした。これで、ロブが朝食に食べたかったものは、イングリシユマフィンだとわかり、ナースはイングリシユマフィンに何を塗るかということで、第一の可能性（ゼリー）を提示した。それをロブは拒否したので、第二の可能性であるバターを提示した。するとロブは第二の提案を受諾したので、朝食に何を食べるかという連接は終了した。

最初のナースの質問には、二つの意味が含まれていたと考えられる。①朝食は欲しいかと②朝食にトーストを食べるか、である。①の質問に対してはロブはイエスと答えている（3）が、②の質問にはノーと答え（4）、拒否を示している。ロブは探求を続けるようにイエスでの最後の音を上げているのだが、ナースにはパンの種類についての探求なのか、コンディメンツの種類についての探求なのかを考えるとなく、ロブはトーストを食べるのだと理解してコンディメンツの探求に入ったのだと思われる。

挿入連鎖が終わるとき、本来の質問の答えが導き出されたと考えてよいだろう。<断片3>は1でのナースの質問に33のはいと答えるまでの間、多くの挿入連鎖が存在する。ロブとナースの会話を分析すると、「質問一返答」もしくは、「提案一受諾／拒否」の隣接対が多く用いられている。ここで隣接対の第二対成分である、ロブのイエスに注目してみたい。

イエスを大きな意味で捉えると、受諾であるが、ロブはイントネーションや音を延ばすことで意味に変化をもたせている。<断片3>において、イエスを4回言っているが、状況も異なれば、微妙に意味も異なっていることに気付く。3のイエスは、最後の音を上げており、対話者に探求の継続を促すものとして発している。ロブは朝食を食べることに受け入れを示しているが、朝食にトーストを食べる提案は拒否している。そのため、イエスのイントネーションを上げて、「uh, no」と答えている。対話者には、この「no」の意味が理解されていなかったために、ロブにとっては間違った連接が続けられることになる。25のイエスは

妻の提案に対する受け入れであり、ロブの探求して欲しかった方向（パンの種類での提案）へ接続が向いたことになる。同じ要求を繰り返した後のイエス（29）は、25のイエスと比べて音のはじめから強く、声が大きく、単語を発する時間が長い⁽⁹⁾。33のイエスは31の第二対成分であると同時に、1のナースの質問に対する探求の終了を示す。35でマフィンに何を塗るかについての質問を受けて、ナースが第二の可能性として提示したバターを受け入れる形で、45のイエスを発話している。このようにロブは自分が利用できる能力を最大限に活用して、1つ1つのイエスに違いを表している。

これはノーについても同様のことが言える。〈断片3〉において4でのノーはトーストは食べたくないことを表示し、後に続くノーはナースの推測に対する拒否というよりも、接続自体の流れを拒否している。それを対話者たちに伝えるために、ノーを強く発話したり、二度繰り返して気付かせようとする。このようにイエス、ノーは状況に応じた形で多様に意味をもって使用されていることがわかる。つまり、言葉の意味が相互行為になっているのである。

また、〈断片3〉はゲームのような流れをしていると見ることもできる。質問する側と答えを知っている人がいて、答えを知っている人はイエスとノーしか言うことができない。質問者は、正解を知るために「それは冷たいですか」、「白いですか」、「食べ物ですか」、「辛いですか」などの質問をする。それに対して、それぞれイエスとノーで回答して最終的に答えを導き出す。このゲームとロブとのやりとりには類似する点が、いくつも見受けられる。第一にロブはイエスとノーしか言うことができない。第二はロブだけが真実の答えを知っている。第三に質問する側が、彼の対話者であり、ロブの答えをいち早く知ろうとしていること、などである。ゲームの正解率を上げるためには、まず出だしの質問が重要になってくる。対話者は、その場に適した質問をすること、状況をいかに適切に読み込んでいるかが大きな問題になってくる。さらに、答えを知っているロブにイエスと言われれば、正解となるが、ノーと言われれば、間違いで遠いものと認識できるので、質問する側は、イエスと言われたら、探求は終了したのだとわかり、ノーと言われれば、違った選択肢を提示することになる。

ロブの発言は、それ自体完全な文章にはなっていないが、対話者との作り上げていく接続の中で適切な意味を持つようになる。彼が適切な場所で適切な返答ができる能力は、彼が他の参与者と協同的な作業を行うことによって意味のある行為を共同的に構築していくことを可能にしているのである。そこには共同者（ナース、妻）の存在が大きい。

対話者は常にロブの聞き手として、彼が返答しやすいように溝を作っている。逆に言えば、会話において、ロブがその場に依じて適切な返答ができるのは、対話者が返答しやすいように溝を作っているためである。適切な溝を構築するには、その場の状況から考えられる選択肢を用いなくてはならない。〈断片3〉におい

て、結果としては間違っただけに導いてしまったのだが、7から20までのやりとりにおいて、ナースはトーストに塗るものとしての選択肢を挙げている。ロブに拒否されると次の選択肢を提示するようにコンディメンツというカテゴリーの中から、可能性のありそうな言葉を先取りして、ロブに伝えることが、彼とコミュニケーションをしていく上で重要になってくると思われる。

ロブとナース、ロブと妻の共同作業もコミュニケーションしていく上で必要であるが、さらにナースと妻も彼の言わんとすることを共同的に理解しようとしている。ナースがコンディメンツの種類を挙げていき、それをすべてロブが拒否したとき、ナースは選択肢の羅列を止めて、冷蔵庫の中身を彼にみせるためにそちらへ歩き始めた。それと同時に妻はカテゴリーをコンディメンツからパンの種類へ変更したのである。二人の行為はもしかすると、偶然に起こったのかもしれないが、二人ともロブが今何をほしがっているかを知ろうという共通の目的は持っていたはずである。

彼の共同参加者は、ロブを中心に参加の組織化を進めている。つまり、彼をコミュニケーション能力のある人と見なして、ロブを無視して勝手に、自分たちだけで話を進めず、ロブを含めて連鎖組織を構成しているたとえその連鎖組織がスムーズに行われていなかったとしても、織りなされた相互行為を見ることができよう。

ロブはイエス、ノーを使用し、さらに答えを知っている側であるが、彼の行為は孤立したものになっていないのは、周りの人が彼の行為を助けることにより答えを導き出しているからである。ロブをめぐるやりとりにおいて、他の参加者に依存した形で相互行為を行うことは、他者への依存度が私たちのコミュニケーションよりも高いだけである。他者への依存度が高い分、コミュニケーションの形がより複雑で、接続の広がりによって時間をとられることになる。依存される側の重要性に重点が置かれることになるだろう。

ロブの言語能力は、単語を三つしかしゃべれないのでかなり劣ってはいるが、周りの人と共に相互行為を築き上げていることは、観察可能である。ロブと他の参加者が交互に話し手、聞き手として振る舞うことができるのは、双方向性のあるコミュニケーションが成立しているからである。そしてこのコミュニケーションの成立に一役買っているのが、その場に適した状況や意味の生成、語りにおける相互行為に他ならないだろう。

注

- (1) 本文中にある〔 〕は、要約者が文意を明らかにするために補った部分である。
- (2) ロブの職業は弁護士であった。
- (3) 失語症とは、脳の病気が原因とされる、全体的または部分的に言語を使用しないし理解できなくなる病的状態のことを指す。
- (4) この論文においてはイエスとノーだけに言及をとどめている。
- (5) 以下に挙げる記号は、この論文のトランスクリプトで用いられている。

るものである。

// 複数行の同じ列におかれた二重スラッシュ：参与者たちの言葉の重なりが始まる箇所を示す。

= 言葉と言葉の間におかれた等号：途切れなく言葉がつながっていることを示す。

() 丸括弧：何か言葉が発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。

(数字) 丸括弧で括られた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。

:: コロンの列：直前の音が延ばされていることを示す。

アンダーライン：当該個所の音が大きいことを示す。

↑ 上向き矢印：音調が極端に上がっていることを示す。

- ハイフン：直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す。

(6) ピッチトラックは数字で表される音を示している。上のグラフは、声の大きさを振幅の変化で表している。下のグラフは、声の高低をドットで表示し、発話された点で1秒ごとの周期の値を表している。(断片3)の25と29のエスの違いを目立たせるために、ピッチの値をつなぐ輪郭の線は著者によって描かれている。

(7) 2頁のトランスクリプトを参照。なお、トランスクリプト記号(5)を参照のこと。

(8) 4-5頁のトランスクリプトを参照。

(9) 7頁の図1を参照

参考文献

Goodwin, C 1995 "Co-Constructing Meaning in Conversation With an Aphasic Man" *Research on Language and Social Interaction* 28(3):233-260

西阪仰 1997 「語る身体・見る身体」西阪仰・山崎敬一(編)『語る身体・見る身体』ハーベスト社：3-29

Schegloff, E.A. and H. Sacks 1972 Opening up closing. *Semiotica* 7:289-327(北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社 1995:178-241)

山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 1993 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力」『社会学評論』173:30-45

山崎敬一・上野直樹・山崎晶子・高山啓子・上谷香陽・浦野茂・中村和生・岡田光弘 1995 「CSCWと相互行為分析-テクノロジーのエスノメソロジー-」『現代社会理論研究』5:93-126